

優秀賞

私を支えてくれているもの

鳥取県 鳥取大学附属中学校 二学年

角谷 夏希

今年の春、母が入院した。定期健診で下顎骨に腫瘍が見つかり、その摘出手術のための入院だった。

母が入院していた一週間、いつも明るく楽しい母がいない家の中はまるで時が止まったかのような静寂で、私は心にぽっかり穴が開いたように感じた。そして『もしも腫瘍が悪性だったら』『もしも手術がうまくいかなかったら』と悪い想像ばかりが脳裏をよぎっていった。母はいつも元気で側にいてくれるものと信じて疑わなかったが、それは当たり前前のことではなかったのだと強く感じ、不安でいっぱいの一週間だった。

幸い腫瘍は良性で、手術も無事に終わり、母は順調に回復した。母が退院すると家にはまた明るくにぎやかな雰囲気に戻ってきた。だが、私の中の不安な気持ちは依然消えることはなかった。それどころか、『もし両親に何かあったら私はどうなるんだろう』と漠然とした大きな不安へと広がっていった。

ある日、そんな私の様子に気付いた母が、私が生まれた時のことを話してくれた。

私が生まれた時、母は無事に生まれてきたことを感謝し喜ぶと同時に、親となることの責任の重さを実感し、私が独り立ちするまでは何としてでも親としての責任を果たさなければと心に強く思ったそうだ。そして、そのために三つのことを父と相談して決めたらしい。その三つとは、健康でいられるように生活習慣を整えること、毎年必ず健康診断を受けること、万が一の時のために生命保険で十分に備えておくことだった。

母の話を聞きながら、「胃カメラ嫌だな。行きたくないな。」とぶつぶつ言いながら人間ドックに出かけていった母の姿を私は思い出していた。今までは考えもしなかったが、私の気付かないところで父も母も私のことを考えて行動してくれていた場面はきっと幾度となくあったのだろうと思った。

三つ目の生命保険については、病気になっても安心して治療に専念できるように医療保険とガン保険、老後に備えて死亡保障だけではなく貯蓄性もある終身保険、万が一の時でも今と変わらない生活ができるように収入保障保険、そして私がやりたいことを思い切りできるようにと学資準備のための保険にも入っていると母は自分で作った生命保険の加入一覧表を私に見せながら説明し

第61回中学生作文コンクール

てくれた。

こんなにもたくさんの保険に入っているのだと驚いたが、それ以上に生命保険と一口に言っても様々な種類があるのだということに驚いた。

保険に入る時には、どのような保険種類があるのか、公的保障ではどれくらい保障されるのかなどを細かく調べ、我が家にはどのような生命保険がどれくらい必要なかを父と母で真剣に話し合っていて、時間をかけてじっくりと考えたのだそうだ。だから、何か予期せぬことが起こったとしても大丈夫だと思いうことができ、日々安心して生活できているのだと母が言った。

母が話し終える頃にはすっかりと不安も消えており、私の心は落ち着いていた。

大好きなピアノに熱中できるのも、家族で旅行に行ったり友達と遊んだりと楽しく生活できるのも、この充実した生活は両親の大きな支えがあるからなのだと改めて思い知った。そしてその父や母、私をさらに公的保障や民間の生命保険といった社会の仕組みが支えてくれていて、その支えのもとに私たちの穏やかな生活が成り立っているのだと知った。

今回の母の入院をきっかけに私は多くのことに気づき、大切なことを学んだ。私を支えてくれていたものへの感謝を忘れず、今自分がするべきことに私は一杯取り組んでいきたいと思う。そして、大人になったら今度は自分が社会の一員として誰かを支えていきたいと思う。